

令和8年度第2回市民活動センター評価委員会 摘録

日時：令和8年6月29日（月）午後1時30分～午後4時30分

場所：京都市文化市民局地域自治推進室 会議室

出席者：

（委員、敬称略）東郷 寛（近畿大学経営学部教授）＜委員長＞
杉原 恵（一般社団法人 my turn 代表理事）
鈴木 ちよ（総合地球環境学研究所 特任専門職員）
住友 聖子（市民公募委員）
山田 洋平（公認会計士）

（事務局）京都市文化市民局地域自治推進室

市民参加・協働支援課長：小林 寛

担当係長：別所 隆男

担当：松島 未来、岩田 朝子

傍聴者：3名

取材者：なし

議 事：京都市市民活動センター令和7年度事業の報告

開催概要

1 開 会

2 議 事

(1) 京都市市民活動センター令和7年度事業の報告

市民活動センターの指定管理者が、令和7年度に実施した事業についてプレゼンテーションを行い、事前に提出された事業報告書も踏まえ、委員から質疑を行った。

＜下京いきいき市民活動センター＞

（山田委員）

アートの事業について、下京区全体に対してアプローチしていくという話であるが、どのように広報していくのか。京都市立芸大というだけでブランド力になると思うので、今後の広報の予定などを教えてほしい。京都市全体に広報してはどうか。

（下京いきセン）

昨年度、展示された学生からは、いきセン周辺にのみチラシを配布していると聞いていた。学生からは、「アートとなるとなかなかハードルが高く感じてしまう方もいるだろうが、気軽に来てほしい」という話があったので、SNSなどで発信した。今年度は、学生と連携しながら、もう少し広範囲にチラシを配布していきたい。センターとして、ロビーを展示空間として貸し出すだけでなく、一緒に広報活動を行えるとよいと思っている。

（山田委員）

みんなが見たいというものではないかもしれないが、見たいという人は多いと思うので、

実施するのであれば、周辺に限るのではなく、広く周知した方がよいと思う。

(住友委員)

下京いきセンの場所がわかりにくいと感じている。特に下京区は東西に長い。いきセンは東部にあるため、西部在住の方は、センターの存在を知らない方も多いのではないかと。下京いきセンのホームページでは、京都駅などからのアクセスは詳しく書いてあったが、下京区西部在住の方が電車やバスなどを利用することは考えにくい。自転車で来館する方も多いのではないかと。駐輪場があることなどもアピールしてはどうか。

(下京いきセン)

本館は大人数での来場が多いため、京都駅からのアクセスを記載している。特にサロンは下京区内の方にもっと利用してほしいと考えており、ご意見を参考に、情報発信の内容を充実させていきたい。

(鈴木委員)

数年来検討していたアートの展示が実現してよかった。作品を機に高齢者と子供の交流が生まれるなど、美術館ではない場所にアートの力を持ってきたことの効果があると感じている。京都市立芸大に近い、立地の良さを生かしている。アートをきっかけに下京いきセンへ足を運んでもらい、さらなる利用につながるとよい。

京都市立芸大の学生、教員から、普段の展示とは違う場所に作品を出したことの効果の声は寄せられているのか。いきセンならではの魅力などはあったのか。

(下京いきセン)

学生や教員の中で、「美術館に行くのではなく、もっと身近な場所で自分の作品を見てほしい」という思いがあることがわかった。また、展示の準備中に、偶然通りかかった住民の方から「この風景を知っている」という声があり、学生や教員との会話につながった。下京いきセンを展示場所にしたことのよさを感じてもらえたと思う。

(鈴木委員)

作品自体もまち歩きの成果を作品に昇華するなど、より一層地元の人が、新規でアートとの接点を見出しやすいように内容が工夫されている。また、ただのアートではなく、まちづくりとアートという視点でプロデュースされているのも素晴らしく、今後も期待したい。

(東郷委員長)

以前、現地を訪れた際、買い物支援を利用されている地域の高齢者の方々が多くおられた。外出できない方や、引きこもりがちな人など、社会的なつながりを持ちにくい状況の方もいらっしゃると思う。こうした方々への支援などは検討しているのか。下京いきセンの建物内には地域包括支援センターやデイサービスセンターがあるので、福祉サービスのコーディネーション機能などがあればよいと思うが、社会福祉協議会とは別枠で運営されているのか。

(下京いきセン)

地域包括支援センターやデイサービス事業所なども同じ建物に入っているが、現時点で、具体的な連携や情報交換まではできていない。

(東郷委員長)

発言できる方もいるが、そうではなく、中には沈黙してしまっている方も相当数いる。そのような人の状況も把握し、それに応じたサービスや支援を行うことが、地域課題の解決につながるのではないかと。エリア的には高齢化が進んでいると思うので、セーフティネット

として担える部分を充実していただければと思う。

＜東山いきいき市民活動センター＞

（杉原委員）

「東山しゃべくり大作戦」の報告で、「これまでつながりのなかった方の参加を促せた」とあった。どのような仕掛けで、どのような方が参加したのか。参加者が固定化してくるというのは、他のセンターやコミュニティも同じ課題を抱えていると思うので、参考に聞かせてほしい。

（東山いきセン）

今回は、「居場所」というテーマに興味のある方が来てくれたのだと思う。ゲストの2人も東山区で活動されている方をお呼びした。参加者がゲストと話し合い、情報交換などをして、ゲストが経営するカフェで新しい取組をしようという、新たな連携が生まれた。

（杉原委員）

市民活動の根本となる部分として、対話や地域の課題として空き家など、継承したものをどうやって活用・再生するかということは、すごく大事なことである。これらを他者の視点を考えつつ、解決につなげられたというのは、大きな成果だと思う。

（鈴木委員）

発表の内容が充実していた。E スポーツなどの新しいものを取り入れながら、地域全体の資産を上手に活用し、うまくそれぞれのステークホルダーと連携されている印象を受けた。

映像事業の発信事業のところで、「SNS や動画制作の新たなトレンドを事業に取り入れていきたい」と今後の展望を述べている。具体的にどのようなところをフォローしていくのか。

（東山いきセン）

動画制作の分野は目まぐるしい変化がある。以前は YouTube 一択であったが、今、AI が入ってきて、だいぶ精度が高まってきた。さまざまなリテラシーには気を付ける必要があるが、動画制作において欠かせない要素である。ただ、それができる人、できない人がいるので、すぐに取り入れていくというよりは、少しずつ試しながら、活用事例を発信していくことを、実践しながらやっていくことを考えている。また、長尺の YouTube だけでなく、SNS 等での1分や30秒のショート動画の形にもシフトしてきている。そういったことも視野に入れつつ、SNS を活用したり、AI を使ったりしていきたい。

（鈴木委員）

東山の変わらない強みの1つは動画系にあると思っている。日進月歩で変化の速い領域だと思うが、生成AIのリテラシーやマナーもフォローしながら、新しいトレンドも取り入れてというところに期待したい。

東山オープンガーデンと地域の縁側に関して質問する。報告を聞いても参加者が非常に楽しそうにしている印象を受けた。フリーコーヒーも楽しそうであるが、提供したコーヒーは地元のお店に依頼したのか、職員が対応したのか。

（東山いきセン）

職員が対応した。センターの職員に元々スターバックスで働いていた職員や、接客が好きな職員がいる。この取組は、お客様である利用者との距離が近くなる。普段窓口対応だけでは聞けないことや、困りごとなどを引き出すことにつながる。そのため、誰かに任せるとい

うよりは、職員が対応することで、顔の見える関係性を作っていきたい。センターの職員ではなく、誰々さんとなるのがよいと考えている。

（鈴木委員）

その説明を聞けば、報告書の空気感に納得がいく。コーヒー1杯でも気持ちがほぐれて、利用者の本音やセンターを良くしていくためのヒントなどにつながっていくのではないか。関連して、次にアーバンファーム、オープンガーデンで収穫された野菜は、参加者が持ち帰っているのか。

（東山いきセン）

収穫をしたものを使って、みんなでパーティーをしている。中庭を装飾し、イベント的に、誰でも参加できるようにしている。いきセン内の調理室を使い、簡単な調理も行った。収穫祭をイメージした。間引いた野菜などは、ボランティアの方が持ち帰ることもある。

（鈴木委員）

その程度の報酬があった方が、ボランティアにとってもインセンティブになって良いと思う。収穫祭などは一番良い形で収穫物をシェアしていると思う。最近のいきセン事業を見ると、全体的に庭を積極的に活用していると感じている。京都では、個人宅での野菜作りなどはなかなか難しい。このような通える範囲にこういった取組があり、緑の景観も保ち、環境保全もしつつ、最後にその成果物をシェアし、みんなでセンターに集う理由ができるというのは、理想的な循環ですばらしい。

最後に、まちづくり助成事業への申請支援（アドバイス）の取組について質問したい。話の中で、そもそも申請のハードルの高さがあるのかと思う。今回、どういうところが、実際の申請までに至らない原因となったのか。今後、実際に申請ができる段階まで持っていくよう、どう支援していくのか。レベル感をお聞きしたい。

（東山いきセン）

区役所の助成金申請は、初めて活動をする方にはハードルが高いと感じた。また、0から活動をスタートさせた方には、まだそこまでお金がかからないという事情がある。助成金を申請するため、数万円単位を使う事業にまでふくらませることが難しい。子育ての情報発信等の活動の場合、そこまでお金を必要としない。今後、事業内容をしっかりと作り込めばできると思うが、計画時間が3~4か月となると、そこまで至らないことが多い。

今年度、区役所と助成金の見直しについて相談している。コンパクトプランとして金額が低いものについて、申請期間が従来の5月までから12月頃まで応募できる形となった。引き続き、区役所と連携しながら進めていきたい。

（鈴木委員）

申請のフォーマットの改善などは申請者本人ではどうしようもない。いきセンならではの助言ができていて良いと思う。これからも期待したい。

（山田委員）

収支決算について、事務費の額がほかのいきセンと比べて大きいようだ。他とは違い、支出に関して特色があるのか。

（東山いきセン）

多目的ホールの光熱費が高い。稼働率が9割あり、日によっては10割ある。夏場は朝から晩まで冷房を付けている。さらにガスと電気両方を使った空調であるため、負担が大きい。

設備が古く、省エネの仕様になっていない。電気代の高騰に伴い、以前は年間で 500 万円を超えなかったものが、660 万円かかることが通常となってしまった。また、比較的部屋数が多いため、電気代で維持費がかかってしまっている。電気代をこれ以上上げるのは難しい状態である。

(山田委員)

光熱水費の話はわかったが、事務費となるとリース料などがあるが。

(東山いきセン)

これは POS レジ、施設予約システムの利用にかかる費用であり、高くなっている。

<中京いきいき市民活動センター>

(住友委員)

SDGs 事業について、いくつかの事業をしているが、個々の事業が 17 の目標の中のどのテーマに当たるのか、ということは分けて実施しているのか。最近の小学生は、SDGs を授業でも学んでいる。子どもたちがテーマの番号に反応してくれることもあるのでは。

(中京いきセン)

企画段階では意識しているが、チラシ等に細かく書くと、難しい印象を与えてしまい、気軽に参加してもらえないことがあるので、そこまで詳しく記載していない。

(住友委員)

SDGs だけとなってしまうと、参加者にどこまで伝わるのかということでお聞きした。最近では小学生も授業で SDGs を学ぶことがあり、子どもの方が大人よりも詳しくかったりする。番号が付いていれば、このことと意識することもあるので、子どもたちがそのことに反応してくれればと思った。

(中京いきセン)

今後の参考とさせていただきたい。

(鈴木委員)

各事業で事前の告知、開催後の広報も丁寧に行われていると感じた。多世代交流事業では 3 種類とも毎週実施していることの意味は大きく、居場所づくりにつながっていると思う。目指すところの高齢者×若者、子育て世代×高齢者だったりとお互いの世代が関わることで、地域に暮らす良さやお互いの知識や交流が生まれていることがすばらしい。どの事業も大学生が積極的に活躍している印象を受けた。いきいき通信にも大学生ボランティアスタッフの声が載っており、大学生が活躍している印象がある。LINE グループでフォローしたり、ゼミまで出向いて大学生を募集している結果だと思うが、大学生の場合、どこでも同じであるが、熱心な学生がいても卒業すれば、そこで立ち消えてしまう。よく聞く悩みであるが、中京では人材の交代は上手くいっているのか、上手くいっているとすれば、どのように対応しているのか。

(中京いきセン)

VONO さんは立命館大学の滋賀キャンパスに拠点があるが、食や食育を意識したサークルであり、大学外部のサークルだったと思うが、連携している大学生のサークルは、しっかりとしており、いきセンとも連携ができています。工芸繊維大学でも学生の入替わりはあるが、随時、学年が変わるたびにメンバーが入ってきています。花園大学は、先生を通じて、子ども

や高齢者と関わるなど希望に応じて参加につながっている。

(鈴木委員)

サークルで引継ぎがされていることも理由のひとつだと思うが、大学生にとっても、自分のやったことの成果が発信され、やりがいにつながっていると思う。最近の学生は一人っ子が多い。大学生が事業を通して多世代と交流し、後継者育成につながっていくと感じている。今後も多世代交流事業に期待したい。

(東郷委員長)

多世代交流事業を盛んに行っている一方で、子どもの貧困などの社会課題へのアプローチについては、どのように考えているか。

(中京しみセン)

センターの NPO 法人などが、子どもの居場所づくり事業や子ども食堂などを、センターを活用することで展開している。今年度からは、小学生から高校生を対象に夕飯を提供する居場所の事業を行っている。しんどさを抱える家庭の子供が利用につながった事例もある。今後も続けていきたい。

(東郷委員長)

京都市への提言などにつなげていただきたい。

<左京西部いきいき市民活動センター>

(東郷委員長)

様々な事業を展開されている。特に印象に残っているのは、外国人との多文化交流事業である。その一方で、交流事業以外の事業にも、外国人の方が気軽に参加されているのかをお聞きしたい。

(左京西部いきセン)

多文化交流事業が窓口になっていることと、そうでない場合もあるが、最近は子育て用品交換会などに海外の方が来てくれるようになった。子どもの方が日本語を話すことができ、親は片言ということがある。そのような方でも交換会となると気軽に来てくれる。その場で、色々お話をし、『どういうことが困るか』等聞くこともある。

(東郷委員長)

子どもはよく話すので、そこを通じて悩みごと等の情報交換を行い、それを事業に活かしていくことは良いと思う。今後の取組にも期待したい。

(鈴木委員)

単なる防災イベントではなく「楽しく美味しい防災イベント」を実施されているのが良い。下京でも話があったが、地域の高齢化を考えると、普段から世代を超えて顔見知りになる機会を作っておかなければ、いざという時に若者の力を借りにくい。若者を巻き込むというのは、どこでも難しい共通の課題であるが、こういう楽しいイベントからというのはすごく良いと思う。

「ふれあい食事会」での、このイベントに限らず主体的な参加を促すための工夫について、苦勞された結果、改善されていったのだと思うが、単なる無料の食事提供ではなく市民活動であることを理解いただくために、どのように働きかけられたのか伺いたい。

(左京西部いきセン)

話をしてもあまり変わらなかった。食器洗いや盛付け、配膳等お手伝いされる参加者が多い中、当初は調理や運営に関わらず参加される方も見受けられた。ワークショップ形式にしたところ、「作るというのは結構大変」ということが伝わったようである。結果、「来なくなる人」と「積極的に手伝う人」に分かれていった。作るのが割と大変ということがわからなかったのではないか、また、自分で作って見たら案外楽しかったというのもあったのかもしれない。全部解決というわけにはいかないが。現在、フリーガーデンでも「Co.Co.ひろば」の人たちがコーナーを作って野菜を育てているが、同じイベントの中で食べることにしている。

(鈴木委員)

是正するというよりは、孤独解消や食育というところにシフトチェンジしたおかげで貢献しているように感じた。そのおかげで救われる人も出てくるのだろうと感じる。大変なことも多いだろうと思うが、応援している。

(山田委員)

子ども会と一緒にイベントされているということであるが、ひとつの学区（養正学区）の子ども会という理解でよいのか。

(左京西部いきセン)

学区の子ども会という理解でよい。子ども会はもともとなかったのだが、センターの近くの教会が子ども会を始められた。最初は時々子ども会でセンターの利用があったのだが、徐々に「何か一緒にやろう」となり広がった。一旦センターの事業となったが、現在は子ども会でも助成金を申請するようになり、今では自走化している。職員も楽しい方で、センターとも一緒に企画するなど関係は続いている。

(山田委員)

自立的に立ち上がってきたところということで、今の時代、こういった活動に消極的な地域も多いと思うが、この地域では積極的に活動されていることがわかった。その要因というか特徴的なことはあるか。

(左京西部いきセン)

演劇などを取り入れて、めちゃくちゃメイクをして、お化け屋敷をするなど、学校も協力的で学校でお化け屋敷をすると雰囲気がある。

(山田委員)

センターのある学区とセンターのない学区で大きな差が生じるのではないかと感じた。学区に拘らずにやっていただきたい。

(左京西部いきセン)

いきセンの事業ではないが、センターの利用者と知り合って、その依頼で小学校への出前事業などを実施していることはある。

(山田委員)

依頼できるものなのか。京都市では地藏盆があるが、多くの地域では何をしたいか困っているのではないか。上手く連携できればと思った。

(住友委員)

ベビー&キッズ用品交換会について伺う。「交換会」ということは、何か持ってこられて、それと交換するという形式か。また、12回開催とのことであるが、品物が集まるのか。写

真を見ると服やおもちゃなど幅広いものがあるようだが。

(左京西部いきセン)

物々交換ではなく、持ち寄られたものについては、一旦事務局でチェックをしている。また、品物も非常に多く集まっており、いきセンでも常時、自由にお持ちいただけるコーナーを用意している。

(住友委員)

需要があり、非常に有意義であると感じた。

＜左京東部いきいき市民活動センター＞

(鈴木委員)

多くの活動について、報告書では「会場を変えて継続していきたい」「ノウハウを活かしていきたい」と報告されている。今後は、久世いきセンということで、物理的に場所が変わるが、上手くいきそうか感触をお聞きたい。

(左京東部いきセン)

新たに南区の久世いきセンの指定管理者となったため、多くの事業のノウハウはそちらに引き継ぎたいと考えている。左京東部で実施したインタビューや聞き取りの事業、交換会も既に今年度実施することとしている。

＜久世いきいき市民活動センター＞

(東郷委員長)

いきセンの現状を踏まえ、今後どのような点を改善していくのか、また、最も優先して取り組むべきことは何か。

(久世いきセン)

4月から「いきいき通信」のような媒体を作成し、近隣に配布するなどの活動を行っている。意外と近隣の方でもいきセンを知られていない場合があり、まずは認知度を高めるための活動をしている。事業も開始したが、インターネットで遠くの人に周知するのではなく、紙媒体を使って近隣にポスティングするなど地道に周囲に働きかけた結果、参加者もそこそこ集まり、貸館の利用件数も増えてきた。まずこのような活動を継続したいと考えている。

また、アクセスが悪いと思われているが、実際は JR 桂川駅から徒歩 15 分程度である。実は左京東部も地下鉄蹴上駅から同じ程度であった。その心理的な距離を縮めていきたい。久世地域は人口が多く、子育て世帯も多く住んでいるので、関連する事業や、地域団体などと連携し上手くやれば需要をもう少し掘り起こせるのではないかと考えている。

(東郷委員長)

地域の団体等とは協力的な関係を築けそうか。

(久世いきセン)

対話をしていく中で、連携できそうな団体も少しずつ増えてきており、自治会の会議等で久世いきセンを利用していただいている。また、すぐ横が保育所・児童館なのだが、そちらとも今度の子ども向けの事業で連携していく予定である。今後広がっていくことを期待している。

(東郷委員長)

これまでになかった需要を掘り起こすことができるかが、ポイントであると思うので、頑張ってください。

<岡崎いきいき市民活動センター>

(鈴木委員)

音楽を核として幅広い視点で取り組まれている。今日は、そのような中で、閉館に向けて自走化が上手くいっている事例を報告されたが、苦労を重ね、対話を重ねた結果だと思う。

感想になってしまうが、あおぞら音楽会について、企画やチラシ作成、司会進行なども高齢者の方が実施したとのことで素晴らしいと感じた。また、センターも細やかにフォローされていると感じた。

(山田委員)

職員の体制は11人で、うち非常勤が10人と、比較的多い方だと思う。一方で、人件費が多いわけでもないの、短時間勤務の職員が多くいるということか。

(岡崎いきセン)

そうだ。基本は常勤、もしくは常勤的な働きをしている職員が、午前9時半から夕方まで勤務し、シフト交代で、お昼から最後まで勤務する。午前の良い時間帯や、活動でかなり忙しい時間帯の2、3時間、スポット的に非常勤の職員に手伝ってもらっている。

(山田委員)

軸になる職員がいて、あとはプロジェクトごとなどで入るというイメージか。人員の入れ替わりは多いのか。固定化されているのか。また、事業自体は常勤の職員2名がいれば、全体が見れる形になっているということか。

(岡崎いきセン)

人員はほぼ固定化しており、事業も常勤の2名がいれば見ることができる形になっている。

(山田委員)

事業数が多いので、効率的に実施されている印象を受けた。工夫されていると思う。

(岡崎いきセン)

自立自走ということで、事業自体も参加者の方に任せられることが増えているので、“あえてスタッフが関わらない”という場面も増やしている。なるべく効率的に、自立自走が進むように進めているところである。

<北いきいき市民活動センター>

(東郷委員長)

運営体制についてお聞きしたい。ベテランの方以外にも、現場では若手の方がいると思うが、世代交代についてどのように考えているか。

(北いきセン)

若手の育成という意味では、特に佛教大の学生たちがボランティアで来てくれているので、彼らが子どもたちに関わっていく。また、ラグビーについては、ラグビー経験者

がタグラグビーの体験会を行っており、そこに学生を呼んできて、その学生たちが、学校に出向いて子どもを対象に体験会を行う。次の高齢者見守りについても、ただの見守りとお弁当ということではなくて、かつて楽只小学校で取組まれてきた地元の人権学習の中身を受け継いで、それを一緒につないでいこうというもの。「そらいろのたね」プロジェクトは、始まるのは今年からであるが、去年までは障害者の自立支援に関わっていた方が集まって、障害のある子ども、引きこもりの子どもの支援をしたいという思いでボランティアメンバーを集めて進めていくということで、他世代へとつないでいきたいと考えている。

(東郷委員長)

活動の世代間継承を進めていることはわかったが、指定管理者としての組織体制やスタッフについてはどのように考えているのか。中堅や若手の育成についてお聞きしたい。

(北いきセン)

事務所スタッフについては、我々が仕立てているのが現状であり、これからの仕掛けが必要である。

児童館では、大学卒業後そのまま児童館の職員になったケースもあるが、いきセン運営においては、ボランティアとしていきセンに関わることで、学生が市民活動支援に興味を持ったということはあるが、そこから正式な職員になったという事例はない。

(山田委員)

外部に出る活動が多いようだが、そのような印象を持って間違いないか。

(北いきセン)

まちづくりということで、会議室に籠ってやるというのではなく、町内の高齢者を見守りに行こうとか、報告書には出ていないが、船岡山の活性化を目指している団体もあるので、今後は、これらの団体と一緒に船岡山に関わっていく予定である。

(以上)